

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第十七回

政治介入の愉快的思い出

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 十七回 政治介入の愉快的な思い出

この春、世界銀行の現場での思い出を本にして、読者から感想が届くようになった。(「国をつくるという仕事」英治出版・本年4月刊行)特に世銀は米国の指示で動くと信じる読者が多いらしく、「アメリカの悪質な政治介入はなかったのか」とよく問われる。

世銀は、ひとさまの大切なお金を預かり、運営し、種々リスクを管理して、自らの運営費用も捻出する正真正銘の金融業。銀行という名はつくが、加盟国の国民が株主の共済信用組合。だから、一部の株主への融資という、銀行には許されない業務ができる。しかし株主を代表する加盟国政府の政治介入が、大きくなりリスクになる。

世銀に限らず企業の命取りになりうることだから、重い質問だ。いつも正直に答える。「アメリカどころか世界各国からの政治介入があるけれど、妨げる術もある」

98年5月、インドが24年ぶりに核実験を再開し、数日後パキスタンが史上初の核実験で返答するという事態が生じた。日欧米数カ国が印パ両国に経済制裁を課し、世銀を制裁に抱き込もうという動きが起こった。アジアから中東・アフリカへのゲートウェイとなる印パの地政学的重要性を語るたびにそっぽを向かれ、両国の市場経済が秘める底力を話しては笑われていた時代のこと。制裁に参加しない世界各国の目も冷たかった。

腹を割って話し合おうと全加盟国の理事を昼食会に招いた。その時の覚え書きを繰ってみると「人道的援助以外は融資をしないように」と口を揃える理事らにこう説明している。「世銀の憲法は、融資は『加盟国の開発ないしは復興目的にのみ使うべし』と定める。狭義な人道的援助は、世銀の使命外。広義に解釈すれば、世銀のなすこと全てが人道的援助だ」

「日本は唯一の被爆国。その日本人の副総裁が言うことか」と米国理事が批判。怒りを理性に飲み込ませたのだろう、覚え書きに残る返答が冷たい。「日本国籍

と米国永住権を合わせ持つ市民として言おう。全世界の軍備費用は人類の無駄使いだ。経済学者としても言おう。経済制裁という国際政治の術も無駄に尽きる。不参加国の交易は自由で、全世界が参加しても密輸がある。ふるいに水を貯める行為と違わない」。喧々囂々の議論になった。

意見が出きった頃を見計らって切り札を出した。「この政治介入を受けて印パ融資を拒否すれば、世銀の市場信用格付けに大きな傷がつく。AAAの格付けだからこそ市場から安く借り、途上国に安く貸すことができる。それが難しくなり、利子がたとえ0・01%上昇しても、途上国の財政に大きな悪影響を与える」

「が、市場は、格付けが落ちる前に動きを始めるだろう。『世銀、印パ制裁へ参加』のニュースが流れた直後、発行済みの世銀債流通市場で価格の暴落が起これと予想する。AAAを誇るといことは、敏感な既発債券流通市場の厳しい抑制を受ける。この現実を決して忘れてはならない」

「発足当時の世銀債格付けがたったBレベルだった史実も、お忘れなく。AAAに昇りつめるまで四半世紀かかった。今日の世銀があるのは、加盟国の資本金もたらす信用、プラス、健全な金融運営を持続した年月の賜物という事実も。最後に、株主の政治介入は銀行を潰すと教える各理事のお国の金融史も、お忘れなく！」

経済制裁参加への圧力は、その後少々燻った後、挫折した。

生意気だが、信念さえあれば、悪質な政治介入から組織を守る術は見つかる。とは言え、そのよい知らせを聞いてほっとした途端に震えがきて、しばらく止まらなかった。今となつては、それもまた愉快な思い出のひとつまだ。

企業組織を成すのが人間なら、その独立性を守るのも同じ人間。法律やガバナンス体系ではない。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇九年八月十日付の電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。